

「聖地大阪とイワクラ（磐座）」 について

イワクラフォーラム委員 橋本 完



はじめに

難波津の天神鼻の変遷

太古の人々は、巨石に魅せられ巨大な構築物としてピラミッド、ストーンサークル、石舞台、城郭など、現代社会からは想像もつかない労力と年月をかけて、石による構築物を聖地とおもわれる処に築いてきた。特に山城といわれている処には多くのイワクラが存在している。または、イワクラのあった処に山城は築かれており、巨石としてのイワクラと聖地の関わりは密接である。

かつて、大阪城のある処は石山とも、難波津の天神鼻ともいわれており、五千年程前は石山の岬であった。この岬を廻り込むと難波津があり、生駒さんの麓まで広大な河内湖が広がっていた。上町台地を形成しているこのあたりは、細長い台地を形成しており、その先端に石山としての天神鼻が存在していたのである。

現代社会では、無用の長物であるかのように巨石は顧みられなくなってしまう。しかし、現代人に最も欠けているのはこの様な巨石の役割や、聖地の場所性を考え直すことから、現代人の感性の回復が始まるのではないだろうか。二〇〇八年のイワクラフォーラムのテーマである「聖地とイワクラ（磐座）」について、現在考えていることを述べておく。

この周辺には石山を聖所として、坐摩神社、玉造稻荷神社、石山本願寺があった。また、上代の時代、石山の南側の上町台地には、難波宮の広大な都が築かれていた。これら、聖地大阪の歴史の痕跡である歴史的遺構を、簡単に紹介する。

坐摩神社は、大阪城が築城される前、旧淀川の大川沿いにあった。大阪城のある城郭の西側に位置する。大川に出来た中州、中之島の東端から三百メートルはなれた左岸にあり、天満

橋南詰辺に鎮座していた。

ここは中世の頃、摂津国西成郡の要所であったところである。蟻の熊野詣でといわれたように、京都から

船で淀川を下り、津津から上陸して熊野詣に参るために整備された九十九王子社の第一王子社として、津津があつた所である。この天満橋付近の地名を、昔は渡辺といったので渡辺津とも呼ばれていた。

現在の地名は、大阪市中央区石町にあたり、坐摩神社の行宮が鎮座する。これは、豊臣秀吉が天正十一年八月（一五八三）に大阪城の築城のさいに、城郭の一部にあつた。このために、船場の中心地に移転した。しかし、神功皇后が三韓遠征から帰ってきた時、石に腰掛けられて休息された跡として、磐がこの行宮には聖所として祀られている。

現在の社地は、大阪の中心である中央区久太郎町四丁目渡辺に鎮座している。これは、当時の渡辺の地名が攝津の国の要所であつた名残りとして、久太郎町四丁目渡辺としてこの地にだけ、渡辺の地名が残っている特殊な町名である。

玉造稲荷神社は、大阪城の南側に位置する。ここは、勾玉を造つていた地であることから玉造と呼ばれている。特に江戸時代には、大阪城南を守護する要として徳川幕府の崇敬が篤かつたところである。

玉造稲荷神社は、垂仁天皇十八年（西暦紀元前十二年）の秋に創祀されたと伝えられ、用明天皇三年に改築。聖徳太子が仏教受容問題で物部守屋公と争われた際、この玉作岡に陣を敷き「我に勝を与えるならこの栗の白木の箸に枝葉を生じさせ給え」と、祈願されたところと言い伝えられており、四天王寺の発祥の地とも云われている。

石山本願寺は、摂津国東成郡生玉庄大坂の石山にあつた本願寺のことを指す。最初、八代目、蓮如が明応

五年（一四九六）に坊舎を建てたのにはじまる。天文元年（一五三二）、京都の山科にあつた本願寺が細川・六角・日蓮宗徒により焼かれたため、本願寺一〇代目、証如は大坂に移り、石山の本坊を本願寺とした。東は大和川、北側は淀川に守られた要害の地であると同時に渡辺津に近く、西は海につづく瀬戸内海方面への交通の要衝であつた。寺院の周辺には大勢の門徒が住み、十一代目顕如は織田信長との石山合戦の末、天正八年（一五八〇）に紀州の鷲森に移り、天正十一年に豊臣秀吉が石山本願寺の遺構を大改造して大坂城の築造を始めるのである。

難波宮は、現在の大阪市中央区にあつた飛鳥時代・奈良時代の宮殿である。戦前までは、所在地不明であったが、昭和三十六年（一九六一）、山根徳太郎らの発掘により、聖武天皇時代の（後期）難波宮・大極殿跡が発見され、その存在が確認された。

難波宮は、奈良時代の神龜三年（七二六）に聖武天皇が藤原宇合を知造難波宮事に任命して難波京の造営に着手させて離宮を設置する。これは、平城京との複都制であり、陪都と呼ぶ。中国の技法に習って、礎石建、瓦葺屋根の宮殿が造られた。天平一五年（七四四）に遷都され、このときに難波京が成立したと考えられている。翌天平十六年一月一日、難波宮から紫香楽宮へ遷都した。七八四年、桓武天皇により長岡京に遷都された際、大極殿などの建物が長岡京に移築された。

現在、難波宮の跡地の一部は難波宮史跡公園となり、大阪城の南に整備されている。難波宮の遺跡は周辺にも及んでおり、NHK大阪・大阪歴史博物館のある一角も難波宮の跡である。この大阪歴史博物館の講堂で、今年のイワクラフォーラムを

さらにこれより古い飛鳥時代の宮殿址も見つかり、これを、前期・難波宮という。

後期・難波宮は、奈良時代の神龜三年（七二六）に聖武天皇が藤原宇合を知造難波宮事に任命して難波京の造営に着手させて離宮を設置する。これは、平城京との複都制であり、陪都と呼ぶ。中国の技法に習って、礎石建、瓦葺屋根の宮殿が造られた。天平一五年（七四四）に遷都され、このときに難波京が成立したと考えられている。翌天平十六年一月一日、難波宮から紫香楽宮へ遷都した。七八四年、桓武天皇により長岡京に遷都された際、大極殿などの建物が長岡京に移築された。

現在、難波宮の跡地の一部は難波宮史跡公園となり、大阪城の南に整備されている。難波宮の遺跡は周辺にも及んでおり、NHK大阪・大阪歴史博物館のある一角も難波宮の跡である。この大阪歴史博物館の講堂で、今年のイワクラフォーラムを

さらにこれより古い飛鳥時代の宮殿址も見つかり、これを、前期・難波宮という。

後期・難波宮は、奈良時代の神龜三年（七二六）に聖武天皇が藤原宇合を知造難波宮事に任命して難波京の造営に着手させて離宮を設置する。これは、平城京との複都制であり、陪都と呼ぶ。中国の技法に習って、礎石建、瓦葺屋根の宮殿が造られた。天平一五年（七四四）に遷都され、このときに難波京が成立したと考えられている。翌天平十六年一月一日、難波宮から紫香楽宮へ遷都した。七八四年、桓武天皇により長岡京に遷都された際、大極殿などの建物が長岡京に移築された。

開催する。

フォーラムの目的

古代人が巨石に抱いた精神は、目に見えない手に触れることのできない、数字や文字で表すことのできないものの存在を、どう太古の人々は認識したのか。これを客観的に考察し、イワクラと呼ばれる巨石が現代社会に生きる我々にとつて無用の長物ではなく、有益なモノであること認識するためのフォーラムとする。

また、かつて石山であった大阪城の天守閣が建つ処は、太古の難波津を指す目印としての岬であった。そこには人の入らない聖なる岬としての石山があり、イワクラが存在していたとおもわれる。イワクラのあるところに多数の聖所が造られたように、聖地とイワクラの関係を語るフォーラムとする。

フォーラムスピーカープロフィール

写真家・山田政春

写真家で、『巨石』（早川書房 二〇〇六）の著者、山田政春がイギリスの田園風景の中で、日常の生活に根ざしているブリテン島にある

エイヴベリーのストーンサークルを紹介している。このエイヴベリーのストーンサークルは、かの有名なストーンヘッジの北へ約二六^{km}離れたところにある。これが世界最大のストーンサークルである。この中にエイヴベリーの村があり、この小さな田舎町は、直径四〇〇^mを超え、円形の土手と、堀^{II}ヘッジに囲まれている。ストーンサークルの中に村が存在しているため、住居やバブ

があり、また、羊たちが放牧されている。

ブリテン島に点在する巨石記念物である巨石達は、主に四千年前から五千年前に築かれたものが多い。ストーンヘッジと共に、エイヴベリー周辺の巨石記念物は、一九八六年、ユネスコの世界遺産に認定されている。また、この辺りのソールズベリー平原は、昔、森林に覆われていた。初期青銅器時代に多くの森が伐採されて土地の砂漠化が進んだため、地面表面を少し擦ると白亜質の台地にごくわずかな表土が載っているのがわかる。その表面が芝生で覆われているのである。そのため、広大な平原が広がっている。

宗教人類学・植島啓司

ロングセラーとなっている宗教人類学の植島啓司の著書『聖地の想像

力』（集英社新書 二〇〇〇年）では、聖地の定義を九つに分類し、この本の最初に提示されている。

- 一. 聖地はわずか一ヶたりとも場所を移動しない。
- 二. 聖地はきわめてシンブルな石組みをメルクマールとする。
- 三. 聖地は「この世に存在しない場所」である。
- 四. 聖地は光の記憶をたどる場所である。
- 五. 聖地は「もうひとつのネットワーク」を形成する。
- 六. 聖地には世界軸 *axis mundi* が貫通しており、一種のメモリーバンク（記憶装置）として機能する。
- 七. 聖地は母胎回帰願望と結びつく。
- 八. 聖地とは夢見の場所である。
- 九. 聖地では感覚の再編が行われる。

このように、聖地の定義は多様なようにもみえるが。最初の定義に基づくと、聖地は一帯たりとも動かないものとして、巨石は何千年、何万年とその場所に存在していることが窺い知ることができる。また、イワクラという巨石のある処は、聖地の定義にほぼ当てはまるのではないかと特に聖地といわれる処は、人が持つ感性に依存して、聖所として認識されることから始まるのである。

植島啓司は、世界中の聖地を今までに八百ヶ所以上尋ね歩いており、文献学的な聖所だけではなく、フィールドワークから培った聖地の想像性を語ったのがこの著作である。

イワクラ（磐座）の呪術性

昔の人々は、石には呪術性が宿っていたと考えた。日本最古の作庭書である「作庭記」は、土に関わり、水に関わり、樹木に関わり、石に関

わる呪術的な記述がなされている。そもそも作庭は、古代的・民俗的・呪術宗教的な感受性と、深く結びついているのである。土も水も樹木も石も、いずれも呪術的な力を帯びうるものであるが、作庭においてはとりわけ石の呪術性が最大の問題となることが「作庭記」では述べられている。

「石をたつるにハ、おほくの禁忌あり。ひとつもこれを犯しつれば、あるじ常二病ありて、つひに命をうしなひ、所の廢墟して必鬼神のすみかとなるべし」

「高さ四尺五尺になりぬる石を、丑寅方に立べからず。或ハ、靈石となり、或魔縁入來のたよりと成るゆへに、その所二人の住することひさしからず。」

要するに、庭を造る時に石を置く方角や配置によっては、犯してはならない禁忌があり、それを犯すとその家系が減じたりすることが、述べられているのである。特に鬼門と呼ばれる北東の方角に、四尺から五尺の石は立ててはならないとある。これは、呪術性の法則を守ることによって、繁栄することの表われと考えなければならないが、人の住む場所であると表わしている。

実際の事例として、大阪城天守閣の丑寅の方角には、石碑が建立されているのである。昭和六年に再建される時、工事の安全祈願を願って建設会社が建てた祠があり、白龍大明神を祭る石碑がある。高さ四尺か五尺ほどの石碑が立っており、天守閣を護っているのである。第二次大戦中の大阪大空襲では、天守閣は被害を免れており、多くの大阪城内にあった建物は被害に遭って破壊されている。このような偶然のチカラを、

これからの現代社会ではどのように再認識していくかが重要なこととなる。

おわりに

「聖地大阪とイワクラ（磐座）」についての関係性を、歴史的遺構の關係から少しでも紹介できたともおもふ。まだまだ、試論的段階の覚書であるが、今年のイワクラフォーラムの開催にあたり、太古の人々が抱いた目に見えないチカラを、イワクラ（磐座）学として考えていくことに、少しでも寄与できれば幸いである。

了